

## セルフメディケーションと薬局製剤・漢方薬～健康長寿のために、日本の食と漢方について考えよう！～

座長  
日本薬剤師会常務理事

高松登  
九州大学大学院薬学研究院准教授  
島添隆雄

現代社会の複雑化に伴い、様々な問題が浮き彫りになってきている。われわれは進歩・進化に身を委ねる一方で、改めて原点に戻り、健康長寿のためにも古き良き時代を見直す必要がある。

健康の基本の一つに食がある。しかしながら、現代の農業や食生活の変化が、必ずしもすべて良い方向へ向かっているとは言えない。例えば、農薬、化学肥料などにより、安全な食が失われつつある。また、農業技術の進歩により、「旬」という文字が消え、野菜や果物などの栄養価も大幅に低下してきている。

さらに、日本の食が、食文化として世界に誇れる和食から欧米食へと変化し、高カロリー、高脂質の食事により、さまざまな疾患を誘発するようになってきた。これらのことが、日本は世界一の長寿国でありながら、健康寿命はほとんど延びていない要因となっている可能性も否定できない。

一方、生薬を構成成分とする漢方薬

も、見直されるべき良き機会にきている。コロナ禍においても、漢方薬の効果、有用性が提唱されている。また、漢方薬の作用機序も科学的に証明されるようになってきた。漢方治療は、古来より食と直結していることもあり、本シンポジウムでその役割を再認識できると考える。

本分科会では、食および漢方のスペシャリストを招いた。まず、飯塚病院漢方診療科の田原英一郎長に、和食と玄米採食による治療について紹介していただく。次に菌ちゃんふぁーむの吉田俊道氏より、菌ちゃんふぁーむでの無農薬有機野菜作りで体調が改善される経験を話していただく。

また、九州大学の比良松道一准教授には、「弁当塾」という大学における実践的な食育教育の意義について講演していただく。最後に、日本薬剤師会薬局製剤・漢方薬委員会の八木多佳子委員長から、薬局製剤を提供する際に併用された食養生について紹介していただく。

以上のように、各演者に幅広い角度から講演していただき、総合討論も行うことで、食および漢方の重要性への理解が深まり、極めて有意義な分科会となることが期待される。

(島添隆雄)

## 薬剤師が支えるスポーツの価値

座長  
日本薬剤師会理事

清水大

福岡県薬剤師会理事

清水敦

スポーツには素晴らしい価値がある。心身の健全な成長・発達、ルールやフェアプレー精神を守る、仲間への信頼や他者を尊重する姿勢、私たちはスポーツを観ることでそのような素晴らしい価値を感じ、とても大きな感動を与えてもらっている。

一方でそのような価値に反するような行為や事件なども起こっている。スポーツに携わる者がスポーツの価値を支えていくために何を考え行動していかなければならないのか、この分科会では各分野における日本の第一人者をお招きし、各々の専門職としてのスポーツの価値を守り支えるためのお話をしていただく。

基調講演としてスポーツ・コンプライアンス教育振興機構の武藤芳昭代表理事から、スポーツ医学の一分野としてのスポーツ・コンプライアンスの理念と、社会での活動、薬剤師の積極的な関わり方についてお話しいただく。

続いて3人のシンポジストにご登壇いただく。健康リハビリテーション内田病院の内田泰彦院長からスポーツドクターとしての道を歩みだしたきっかけと、世界水泳選手権、オリンピック・パラリンピック帯同、福岡ソフトバンクホークスのチームドクターとしての経験からのスポーツファーマシストへの想い、連携について、AND-Uの吉村俊亮代表取締役からサッカーの香川真司選手など世界で活躍するトップアスリート専属サポートの経験などから、管理栄養士・スポーツトレーナーとしての活動について、黒田薬局の松島美菜氏からご自身が水泳日本代表選手として出場したロンドンオリンピックと、そこに至るまでのアスリートとしての経験、現在薬剤師としてアスリートを守る立場から、スポーツの価値を支えるためにできる事についてお話いただく。

最後は演者の方々と総合討論を行う。スポーツの価値を支えるために、多職種連携の中で何を考え行動していくべきか、この討論を日本の新たなスポーツ業界を構築するためのキックオフミーティングとしたい。

(清水敦)

## くすり教育活動における学校薬剤師の役割

座長  
日本薬剤師会常務理事

富永孝治

福岡県薬剤師会副会長

宮谷英記

セルフメディケーションを推進する動きが強まっている。このような状況に対して、国民は医薬品に対する正しい知識を得ることが求められ、中高生には医薬品の適正使用に関する基礎知識の定着を目指す「くすり教育」が実施されている。本分科会では「くすり教育」と「薬物乱用防止教育」の両面から、学校薬剤師が今やるべき役割について掘り下げたい。

「健康・安全に向けた薬育と学校薬剤師への期待」として文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課の小出彰宏健康教育調査官による基調講演では、医薬品に関する教育が行われた割合は中学校で57.8%、高等学校で65.1%であり中学校で医薬品に関する教育が始まって約10年になるが、全ての中学校、高等学校で実施されていないことの原因などについて講演いただく。

次に「薬物乱用の現状と薬物乱用防

止教育―大麻等について―」として愛知県学校薬剤師会の木全勝彦代表理事に薬物乱用防止教育について、従来型の薬物乱用の恐ろしさを強調するのではなく、なぜダメなのかを医学、薬学および法律との関係性など総合的な正しい情報を青少年に伝え、自ら考えさせることや、身近な医薬品、医薬部外品、食品(清涼飲料水等)等の不適切使用等について講演いただく。

次に「子どもたちの健康のためのくすり教育」としてくすりの適正使用協議会の依木登美子理事長から同協議会が行っているくすり教育の支援について、くすり教育のための各種教材を作成提供、授業に活用できる模型などの貸し出し事業、くすり教育を行う先生方を対象とした、授業の構成例や活用できる各種資料の紹介などを行う出前研修など、学校薬剤師の活動を支援されている現況等について講演いただく。

本分科会を通じ、学校薬剤師の「くすり教育」が児童、生徒、学生の生涯を通じ、自分の健康と病気の治療に役立てることの出来る力を養う教育になるものと確信している。

(宮谷英記)

## 寄り添う医療とコミュニケーション～言語コミュニケーション

### 障害への対応～

座長  
日本薬剤師会常務理事

亀井美和子

福岡県薬剤師会常務理事

田城涼子

日々の業務でコミュニケーションの取り方に苦慮した薬剤師も多いのではないだろうか。

日本において、65歳以上が人口の約3割を占め、高齢化が進展しており、そのうちの4分の1が難聴者、6分の1が認知症有病者といった統計も出ている。加齢に伴い、服用する薬の種類が増えてくる傾向にある中、難聴者や認知機能が低下した高齢者に対し、良好なコミュニケーションが求められている。

また、症状や置かれている環境は人によって大きく異なり、その多様性や状況、ヘルスリテラシーに合わせて医療や情報を提供することが重要である。

本分科会では、聴覚障害や認知症の患者とのコミュニケーションのあり方について考えていく。

基調講演として、東京通信病院病理診断科の田村浩一医師に「難聴者から見た薬剤師に求められるコミュニケーション」と題し、講演いただく。田村

医師ご自身も遺伝性の聴覚障害をお持ちで、40歳ごろから症状が進んだとのこと。聞こえる立場から、逆の立場になったからこそ見えてくる課題や疑問を示し、また薬剤師に求める対応についてお話いただく。

次に国立病院機構東京医療センターの本田美和子総合内科医長からはマルチモーダル・コミュニケーション・ケア技法のひとつである「ユマニチュード(特に高齢者と認知症患者において有用とされている包括的ケアメソッド)」の基本や技術要素、成果について講演いただく。

最後に第一薬科大学地域医療薬学センターの依口奈穂美教授からは、薬剤師と聴覚障がい者を対象とした、服薬指導のコミュニケーションに関するアンケートから見えてきた認識の違いや、問題点について紹介いただき、薬剤師に何が求められていくのか一緒に考えていく。

コロナウイルス感染拡大によるマスクの着用や、時限的・特例的な取り扱いである0410対応など、コミュニケーションが取りづらい環境の中、本分科会が高齢者や聴覚障がい者だけでなく、様々なシーンで活用できるヒントとなれば幸いである。

(田城涼子)

薬事日報の好評連載コラムを書籍化!

地域医療における  
薬剤師のあるべき姿を  
考えるための一冊!

# 薬剤師の未来進行形

対物業務を超えて、世界標準の薬局を目指して—

若子直也 著  
四六判/186頁  
定価 2,200円  
(本体 2,000円+税10%)

詳細・購入はこちら▶



薬事日報社